

火合峯は、古代に種子島で3カ所だけノロシ台が設置された場所の一つとされています。

この頃全国的にノロシが設置されますが、それは、天智天皇の663年、白村江(今の韓国の錦江付近)で、日本と百済の軍が唐と新羅の連合軍に大敗したことに起因します。以来日本は、当時大国であった唐と新羅の大軍が、いつ進攻して来るかという恐怖にさらされており、今の福岡で太宰府周辺の水城をはじめ、防御用に大陸式の山城を築き、そこに防人を配備するなどの対策を講じました。また瞬時にして百里を走るという、高速軍事通信ネットワークのノロシ(古名トブヒ=ほう烽=トビ・トミとも訛る)を、九州の島々から都にまではり巡らせました。

種子島は、東シナ海を挟み、唐(中国)と対面していて、当時の日本の最南端の島であったため(この後、大同2年(702)「多禰国」が創置される)ノロシが配備されたのです。

屋久島宮之浦の火立峯・住吉岬の火立峯・花里の火立峯などと共に、南種子では、ここ島間の火合峯が古代のノロシ台跡とされています。

江戸時代になると、幕府は諸藩に命令して全国の絵図(地図)をつくらせました。絵図は慶長、正保、元禄、それに天保の各時代に作られましたが、そのうちわれわれが目にするのできる最も古いものは元禄絵図です。

それによると熊毛郡では、赤尾木・増田・島間・口永良部・宮之浦・永田・湯泊等が遠見番所と書き込まれていますので、元禄時代の番所の位置と数が確認できますが、それも時代が経つにつれ、その数は増えていきました。

沿海の村々に設けられたこれらの番屋は、かつての古代ノロシ跡が用いられる場合が多かったのですが、速馬も併用され、替え馬も準備されました。

このように種子島のノロシは、古代に使われたほか、蒙古襲来、鉄砲伝来、さらに江戸時代になると異国船来航の際に、実際に活躍したと思われます。



火合峯に再現されたノロシ台